

柳 祭

三重県神道青年会報 第27号



先ず以て、昨年六月十六日に激動の昭和を先帝陛下と共に歩まれた香淳皇太后が崩御あそばされた事、ここに改めて奉悼の誠を捧げ奉ります。

さて、種村前会長より引き継ぎ、平成十一年度、十二年度の青年会の会務をお預かりしてより早や二年、様々な想いを抱きつつ、今日を迎えることができました。緊張と不安のスタートでありましたが、今となれば、安堵感と一抹の寂しさを感じる次第であります。この二年間、滞りなく会務執行が出来ました事は偏に先輩諸兄の御指導、更には役員各位の御協力の賜物と

会長 福田和人

衷心より厚く御礼申し上げる次第でございます。振り返れば、一年目には巡り合わせと申しましょか、創立五十周年という佳節にその任に当たらせていただいた事、僭越極まりない事と存じております。役員一同、一丸となって五十周年事業に取り組んだ一年でありました。又その際、絶大なる御協賛を賜りました関係各位の皆様方に、改めて深く感謝申し上げます。節目のこの五十周年の夫々の記念事業は、我々役員一同、一生こころに残るものであります。翌二年目には、神社庁、青年会共に東海地区の当番県を迎え、北に南にと会場を設置し、接遇申し上げた次第であります。八月末には、四日市市において東海地区教化研修会を開催。幻の映画「氷雪の門」を上映し、五県青年神職七十二名、感動を胸に事終えたのも、昨日のような気がしてなりません。十月

上旬には、神青協海外宗教事情視察研修として隣国、韓国を訪れ、かつてない研修が出来ました事も深く心に刻まれております。しかしながら、昨今の世情を思うとき、自然環境の破壊、更には幼児虐待や教育問題等、様々な問題が勃発し、この世のものとは思えない状態が続いております。時局いよいよ多難な中であって、我々青年神職に課せられた事、則ち、五十周年のテーマであります「伝えよう大和心」更には、神青協のテーマ「次世代への継承」の如く、天地の恵み、先祖の御恩に感謝しつつ、先輩方が培ってこられた日本の国柄、そして伝統を守り伝えて行くことに他ありません。近年、青年会員の減少が切実な問題となってきておりますが、会員相互の強い結束と厚い信頼感とで乗り切っていかなければなりません。志を同じくして一丸となれば、必ず結果は出せるものと確信しております。まだ卒業する訳で



はございませんが、残すところ今一度、奮励努力して参りたく存じております。末尾ではございますが、この二年間、御指導いただいた諸先輩、更には役員会員の皆様様に満腔の謝意と感謝の意を表し、愈々、三重県神道青年会が発展されますことを乞願奉りて、御礼の言葉とさせていただきます。



副会長 喜田川 宗之

平成十一年四月に副会長に就任戴き、大役を仰せ付

かってから早二年の歳月が過ぎようとしていきます。振り返ってみますと、福田会長を始め、役員、会員の皆様のお力添えを賜り、無事務めさせて戴きました事を先ず以て厚く御礼申し上げます。この二年間の中で、私にとりましても、会員皆様にとりましても創立五十周年と言う大きな節目を迎え、感慨無量の時だったと思います。特に、私の場合、父が第八代会長を務め、私が第十九代の副会長を務めさせて戴き、二代に亘って三重県神道青年会の役員に携わる事ができました事は、この上ない喜びであります。この二年間の活動を顧みますと、平成十一年六月、三重県神道青年会創立五十周年記念大会が催行され、私も初めての大役を仰せ付かり、良い経験をさせて戴きました。また、八月には、創立五十周年のテーマ「伝えよう大和心」に基づき、お宮の子供会

が、内宮正式参拝、内宮古殿地清掃を中心として実施され、本宗と仰ぐ神宮との結び付きを強くされました事は、次世代への神道精神の継承と言う意味で大変有意義な事だったと思われま。平成十二年三月には、歴代役員OB会が行われ、片岡神社庁長を始めOBの諸兄の方々から貴重なお話しや忌憚の無いご意見を戴き、将来に向けての更なる取り組みに大いに役立つ成果が得られた事と思ひます。また、八月には、当県が東海プロックの当番県となり「平成十二年度神道青年東海地区教化研修会」が開催され、先ず、樺太一九四五年夏「氷雪の門」と言う、貴重な映画を鑑賞しました。この映画を通じて、当時の方々の愛国心と共に生命の尊さ、人としての在り方を学ぶ事が出来たのではないでしようか。現在の歴史教育が如何に偏向されたもので有るかを考えさせられる映画でもありました。また、本間、中島先生の講演を拝聴し、日本の教育現場の現状と共に、歴史教育・道徳教育の在り方を深く考えさせられました。特にここ近年、青少年の凶悪犯罪、親による幼児の虐待等をニュースで目にす



るにつけ、命の大切さと共に家庭教育の在り方を考えずにはいられません。次に、担当させて戴いた総務広報委員会につきましては、浅学非才な私を内保委員長、塩崎副委員長を始め委員の方々力が合せ、ご協力戴いたお陰で責務を無事果たす事が出来たように思います。特に、三重県神道青年会創立五十周年記念誌『榊葉』の編集に当たりましては、かなりの時間を費やし、今までも増して立派な記念誌を作り上げることが出来たように思います。最後になりましたが、会の益々の発展と会員諸兄の御健勝を祈念し、御礼の言葉と致します。二年間、本当に有難うございました。



副会長 田中 淳

三重県神道青年会の副会長という重職に、思いもか

けず指名を頂き、僭越ながらお受けしてより、早二年の任期を無事終えることが出来ましたのも、役員、会員始め斯界の皆様のお陰と感謝申し上げます。この二年間を振り返り、まず、創立五十周年の記念の年を迎え、記念大会を開催させて頂きましたことは、大変光栄でありました。先輩諸氏が赤心の思いにて築いて来られた伝統を踏まえ、お祝い申し上げますが、改めて重責に心を引き締めた次第です。私が担当させて頂きました教化研修委員会は、中野雅史委員長、中野哲彦副委員長のもと優秀な理事が集い、キャリアを積み優れた行動力の委員長と兄弟の如く息の合った副委員長のリーダーシップにより恙なく諸事業が遂行出来ました。中でも、創立五十周年記念事業として開催した「第二十三回お宮の子供会」を、約百四十名の

児童が集まり神宮の古殿地清掃や神宮諸施設にて行わせて頂きましたことは、日本の親神様である神宮を理解するとともに、次期遷宮へと繋がるものと思います。また、昨年四日市市にて開催致しました「神道青年東海地区教化研修会」では、「神社・歴史・伝統」の主題のもとに、先の大戦を題材とし研修を行い、現在の社会情勢を踏まえ、自虐史観の横行を正すべく、日本の誇り・精神を学び、我々神職の伝えるべきものを確認できたことは有意義であったと思います。その他「神宮大麻頒布促進運動」「他会との合同研修会」を行い教化に務めてまいりましたが、事業を行うことは、自分自身の為の勉強でもあり大変貴重な経験をさせて頂き今後の糧となることと思えます。

私自身、この任期の中で神道青年会にどれ程の貢献が出来たかと考えると、甚だ疑問であります。ご協力ご理解頂きましたことに衷心よりお礼申し上げます。今回の機会を与えて頂きましたことに感謝申し上げます。

二年間を振り返って

副会長 山路 太三



平成十一年四月に副会長という大役を仰せ付けていただきました事、先ずは御礼申し上げます。

この二年間を振り返れば、先ず、「三重県神道青年会五十年間」という事業が思い起こされます。皆様ご存じの通り役員数の減少に伴う慢性的な人手不足、経済状況の思わしくない時に当たってどのような記念事業に仕上がるかという予算面の問題、又五十年という大きな節目に際しての反省とまとめ等、種々の問題を含んでいました。しかし、これらの課題を乗り切るために役員一同誠心誠意、職分を尽くして努力いたしました結果、成功裏に幕を閉じましたことは感無量なものであります。

また次には、「お宮の子供会」を当神社で行ったことです。一泊二日という短い期間ではありましたが、神職子弟達にとっては貴重な体験であったと思います。早朝、天の磐門へ行って禊ぎをしたり、神社の境内で必死になってクワガタを探したりしました。こうして自然と触れ合うことによって学んだことは生涯忘れることはないと思います。

さて、世の中に於いては暗いニュースが毎日のように流れています。個性重視の教育により様々な生き方が認知され、又、それに伴う生活の多様化が現れて来ました。犯罪もこのような多様性の中から生まれてくると思います。

このような時代にこそ、我々青年神職の果たす役割は何かを、真剣に議論する必要があると思えます。今年から二十一世紀になります。この新世紀を「新生」の時代にしなければなりません。大きな事は出来ないと思えますが、「隗より始めよ」です。若さの特権を生かして、チャレンジして貰いたいと思えます。

最後になりましたが、神道青年会の益々の発展をお祈り申し上げます。

卒業生名簿

(平成十一・十二年度)

- 多奈閉神社禰宜 嶋田 秀哉
 - 松阪神社宮司 波多瀬秀之
 - 花岡神社宮司 小林 一茂
 - 沼木神社宮司 米山 公美
 - 椿大神社禰宜 池田 陽一
 - 鶯川原神社禰宜 内田 良典
 - 阿田和神社宮司 宮地 秀直
 - 中原神社禰宜 伊藤 智
 - 棕本神社禰宜 駒田 良介
 - 春日神社禰宜 居附 功二
 - 金井神社宮司 種村 睦
 - 多度大社禰宜 飯沼 喜規
 - 赤羽神社禰宜 東 浩成
 - 彌都加伎神社禰宜 藤田 弘幸
 - 鎮国守国神社宮司 嵯峨井和風
 - 神宮宮掌 堀川 孝雄
 - 神宮宮掌 岡本 清彦
 - 神宮宮掌 長内 弘昭
- (敬称略)

定例総会

平成十一年度定例総会が四月二十四日、神社庁会議室にて福田会長以下役員、会員十三名、来賓二名の出席にて開催された。

開会儀礼の後、会長挨拶、来賓の片岡神社庁長、山中氏子青年協議会長より祝辞を頂戴し、その後、田中副会長を議長に選出し議事へと移った。

まず、平成十一年度会務報告、会計決算報告、創立五十周年事業会計決算報告、監査報告、創立五十周年の残金処理について夫々説明がなされ承認された。

続いて、平成十二年度活動方針



案並びに事業計画案、同会計予算案が説明され、承認を受け、定例総会は滞りなく終了した。

本年度は寂しい出席者数であったが、青年会員として自覚を持ち、積極的な参加を望むところである。

(原記)

新職員交流会

去る七月六日、新会員の入会を祝して「新職員交流会」が行われた。当日は、午後三時から津グラウンドボールにおいてボーリング大会が、続いて、午後五時から神社庁において懇親会が行われた。

ボーリング大会は、福田会長の始球式をもって開会した。始めは緊張していた新職員たちもすぐに打ち解け、各レーンとも歓声が飛び交う熱いゲームが繰り広げられた。



その後は会場を神社庁に移して懇親会が行われた。懇親会が進む中、ボーリング大会の結果発表、



表彰式が行われた。優勝は福田会長。新職員最上位は三位の芝本会員。ブロック別では南勢が優勝を果たした。

この後、会場はボーリングの得点成績などを肴にさらに盛り上がり、新会員も現役会員らと楽しく交流を深める有意義な会となった。

(神田記)

会務報告

〈平成十二年四月〉

- 六日 神社総代会定例総会
 - 一名奉仕 神宮会館
 - 創立五十周年実行委員会 反省会
 - 二名参加 鳥羽市内
 - 一八日 第五回神青協定例総会
 - 三名出席 神社本庁
 - 二四日 平成十一年度定例総会
 - 一三名出席 神社庁
 - 〈五月〉
 - 八日 第一回役員会
 - 一名出席 神社庁
 - 一〇日 神政連結成三〇周年記念東海地区大会並びに東海五県連合総会
 - 一七名奉仕 花水木
 - 〈六月〉
 - 九日 第二回役員会
 - 二名出席 神社庁
 - 二七日 神道青年東海地区協議会
 - 六名出席 椿大神社
 - 〈七月〉
 - 六日 第三回役員会
 - 二名出席 神社庁
 - 新職員交流会
 - 二九名参加 津グラウンドボール
 - 二七日 第四回役員会
 - 六名出席 磯部神社

第二十四回 お宮の子供会

八月二日・三日の両日にわたり、磯部町の磯部神社において恒例のお宮の子供会が開催されました。夏の暑さをものもしない元気な十六名の子供が参加しました。

正式参拝の後、班別に分かれて自己紹介をして、早速、万古焼きの蚊取りフクロウの色付けを楽しみました。その後夜の出し物の練習をしました。最初は恥ずかしがっていた子供たちも練習を重ねていくうちに、お互いに打ち解けてきて和気藹々とした雰囲気になり交流も深まっていきま



披露し、仲良くゲームをしたり歌を歌ったりして盛り上がりました。翌日、早朝より天岩戸の禊場へ移動をしました。朝の清々しい空気の中、禊を始める子供達の顔も引き締まってきます。道中の笑顔も消え去り、神妙な面持ちで滝にうたれる子供達の姿は明日を担う世代として、とても頼もしく見えました。朝食後に志摩マリンパークへ出かけ、仲良くなったグループで各々気に入った魚に見入ったり、ちよんご催しをしていた磯辺の生き物に触ったりして楽しんでいました。最後の行事である宝探しでは、境内のあちこちを懸命に探し回り、景品の大クワガタを貰って歓声をあげていました。楽しいお宮の子供会も最後にお世話になった境内の清掃をして、来年の再会を約束して解散しました。(藤田 記)

神青協夏期セミナー

平成十二年度夏期セミナーは八月の二十三日・二十四日の両日国学院大学において「現代の宗教と社会問題」を主題とし、全国から百十二名の会員が集い開催された。初日の開講式のと、日弁連消

費者問題対策委員会宗教部会に所属する紀藤正樹弁護士が「宗教的活動に関わる消費者被害の実態について」と題し講義が行われ、靈感商法や霊視商法に限らず、宗教にまつわるトラブルが事件化する現状を消費者の被害として例を挙げて紹介し解説され、宗教被害への理解と被害者の精神的な救済の協力を呼びかけた。

この後国学院大学日本文化研究所教授井上順孝氏より「若者と現代宗教」と題し講義が行われ、村落社会から都市社会に移行する中で伝統的宗教の機能が必要でなくなってきた現状を指摘された。翌日は皇学館大学助教授河野訓氏が「宗教をめぐる諸相」と題して日本の主な宗教団体について解説され、仏教と現代社会の関わりを例にこれからの神社の在り方について述べ、地域との繋がりを維持しながら、神職がもっと外へ出てもっと何かをすべきではと祭りを中心に組織を作っていくことの意義を話された。これから我々神職は情報化が進む現代社会にあって、次世代にどのように伝えていくべきか真剣に考えて行かなければならない有意義な二日間であった。(中里 記)

東海五県教化研修会

去る八月三十日、三十一日の両日、神道青年東海地区教化研修会が四日市市で開催された。会員七十四名の参加のもと、「神社・歴史・継承」を神職が今、伝えるべきものとしてテーマに、現在は放映中止となっている幻の映画「氷雪の門」を上映した。講師に皇學館高等学校教諭、本間一誠先生、中島英哉先生、平野昌也先生をお迎えし、解説を受けながら、三時間ほど映画を鑑賞した。



二日目には本間先生に「日本の教育の現状」、同じく中島先生には「歴史を観る視点と着眼」と題し御講演を賜った。本間先生は現行の教育基本法の矛盾点を指摘され、今後の学校教育のあり方について述べられた。

又、中島先生は、北方領土問題をとり上げつつ、日本人の国土に対する無関心さを指摘され、我々日本人はもっと日本人であることを自覚し、愛国心を育てていく必要があると主張された。

引き続き意見討論会があり、そこでは、北方領土をはじめとする領土問題、現在の教科書問題、青少年の犯罪等、多数の質問や意見が飛び交った。

今回の研修で、我々は祖国を思う心、つまり愛国心を今以上に育んでいくこと、そして自虐的史観ではなく正しい史観で歴史を学び日本人として祖国を誇りに思うということを再認識し、今後の教化に生かしていかねばならないと感じた。

(松岡 記)

福祉講演会

去る十月二十七日(金)午後五時より、神宮司庁において神宮神道青年会との合同研修会が開催された。

本会からは福田会長以下十三名、また神宮神青会員及び職員有志約四十名が参加した。

今回の研修では、皇學館大學社会福祉学部の櫻井治男先生をお招きして、「福祉社会と神社の役割」というテーマで御講演を賜った。

講演の内容は日本の福祉社会論に始まり、宗教と社会福祉活動の関わり、その中でも神社界の活動と地域福祉における神社の役割についてというものであった。

これからの時代において、神社界とも深く関わってゆくであろう社会福祉についての興味深いお話を伺い、大変有意義な研修となった。



質疑応答の後、場所を移して懇親会が催され、盛況のうちに幕を閉じた。

(見垣 記)

八月 二～三日 第二十四回お宮の子供会 一五名参加 磯部神社

二日 第五回役員会 九名出席

二二日 四日市シティホテル

二二～二四日 神青協夏期セミナー 五名参加 本社本庁

三〇～三二日 神道青年東海地区協議会 及び教化研修会 一九名出席 四日市シティホテル

九月 二日 敬神婦人連合会定例総会 六名奉仕 神宮会館

二六日 第六回役員会 一三名出席 本社庁

一〇月 二～五日 神青協海外宗教事情視察研修 二名参加 韓国

一五～一六日 初穂曳 二名参加 伊勢市内

二七日 第七回役員会 一三名出席 神宮会館

神宮神青・県神青合同研修会 一五名参加 神宮司庁

三〇日 神社関係者大会 一〇名奉仕 神宮会館

十一月 八日 神青協臨時総会 四名出席 本社本庁

二九日 神道青年東海地区協議会 五名出席 三重県護国神社

二月 五日 敢國神社例祭助成奉仕 四名奉仕 敢國神社

七日 大麻頒布促進運動 一二名奉仕

一三日 第八回役員会 八名出席 松阪神社

忘年会 二三名参加 松阪市内

平成十三年一月 二九日 第九回役員会 一三名出席 川梅

新年会 二三名参加 川梅

三〇日 親睦会 一〇名参加 磯部町内

二月 二二～二四日 神青協中央研修会 九名参加 富山市内

三月 五日 第一〇回役員会 八名出席 本社庁

一九日 神道青年東海地区協議会 九名出席 神宮会館

二四日 氏青・神青合同研修会 一三名参加 本社庁

二五日 三重県護国神社合祀祭助成奉仕 六名奉仕 三重県護国神社

三一日 『榎葉』二七号発行

神宮大麻頒布促進運動

昨年の十二月七日(木) 神宮大麻頒布促進運動として、会員十二名、女子神職二名、神宮研修所の学生(二年生)八名、総勢二十二名が、員弁郡員弁町の金井神社(種村陸宮司)に集合し、西桑名ネオポリスに於いて執り行われた。

当地での大麻頒布促進運動は十回目を迎え、二、三名を一組として九班に分かれ出発した。今年は初めて女子神職会、神宮研修所の学生の参加を得て一同は、神宮大麻、広報誌、住宅地図を持ち一軒ずつ隈無く回った。沢山の留守宅があったが、毎年うけて頂く家庭



では、白衣白袴の姿を見て、「よく来てくれました。」との有り難い言葉を頂き、神棚拝詞を奉上し、御札を丁寧に神棚へ納め心を込めて奉仕した。

今回は未経験者も多く、特に神宮研修所の学生には、これから神道人としての奉仕の心を持ち、時代に応じた活動を続け頑張ってもらいたい。(長井 記)

親睦会

一月三十日、伊勢志摩カントリークラブで冬晴れの陽射しの中、恒例のゴルフコンペが行われた。OB三名を含む十名の参加者は、志摩の海風を受けながら白い球を小さな穴に入れるため、緑の中、棒を振り回しながら進んでいった。

前日の新年会のアルコールが体に残っているためか、スタートすぐのコースで全員二桁という組もあった。昼食の時には、みんな元気に午前のプレイについて話の花を咲かせていたが、最終ホールでは年齢のためか、日頃の運動不足のためか、参加者の多くの背中には、楽しさより疲れのほうがかさかさかかかっているように見えた。



今回で四回目ゴルフコンペ、過去三回の優勝者はOBであった。しかし、今回初めて、現会員である福田会長がその栄誉に輝いた。終了後のパーティの席で、来年度の親睦会について話し合われ、ゴルフもいいが、参加者が限られてきているので、違うことを考えていてもいいのではないかとという意見が出された。しかし、親睦会がゴルフでなくなっても、青年会のゴルフコンペは残していこうということに一致した。(内保 記)

氏子青年会との合同研修会

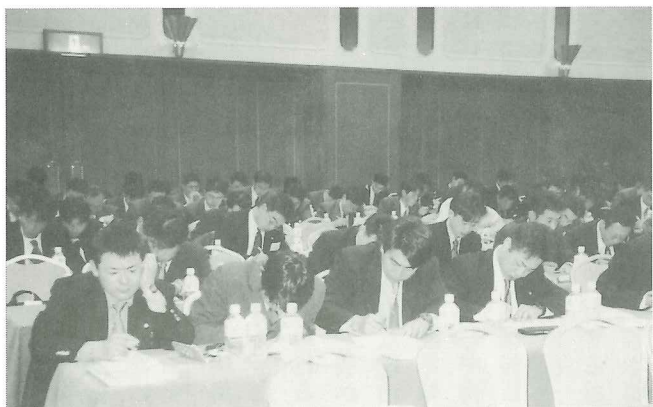
三月二十四日、神社庁で氏子青年協議会員二十四名、神道青年会員十三名が参加して、合同研修会が開催された。英霊にこたえる会製作のビデオ「君にめぐりあいたい」を鑑賞した後、三重縣護國神社宮司原光夫氏をお迎えして、「戦跡にて慰霊祭を御奉仕して」という演題で御講演いただいた。ビデオは、大東亜戦争を侵略戦争とする考えに理路整然と反論し、祖国のために命を賭して戦った英霊たちの姿を伝えるもので、鑑賞のあと目頭が熱くなった。御講演は原宮司様が経験された不思議な体験や人々のふれあいをもとに、遺族の皆様の思いにふれながらのお話で深く心を打たれた。氏青・神青でこのような研修会がもてたことは大変意義のあることである。(内保 記)



神青協中央研修会

去る二月二十二日、二十三日の両日、平成十二年度神青協中央研修会が富山県神道青年会の担当で、富山国債会議場(二十二日)富山第一ホテル(二十三日)を会場に開催され、当県からは福田会長以下九名が参加した。

研修では、「日本の進む道」を主題に、先ず西岡力先生(現代コリア編集長)が、北朝鮮による日本人拉致問題、核開発疑惑、テポドンミサイル発射実験に対する日本政府の対応の悪さ、日本人の国防意識の薄さを批判し、自国が第三国に蹂躪されている事実を自覚し、祖国防衛のため然る可き自衛権を行使すべきであるということことを強調された。続いて第二講では、黄文雄先生(中国研究家)に「台湾、中国の対日政策に関して、今後の日本のあるべき姿をも踏まえて詳述頂き、また青少年に対する道徳問題について、善の強制である儒教的道徳からの脱却を計るべきである」という見解を表された。その後懇親会が行われ、北陸の地酒、鱒寿司、氷見うどんなどの特産品に舌鼓を打った。二日目は佐々淳



(宮田 記)

行先生(元内閣安全保障室長)が、日本の危機管理体制について阪神大震災とサンフランシスコ地震を取り上げ、阪神大震災だけがあれほどまでに死傷者を出したのは、危機管理体制の不備が引き起こした人災であったことを指摘し、早急なる整備と改善の必要性を力説された。

開講式では、次回開催県の愛媛県が特産のポンジュースの一气飲みでその意気込みを表し、盛会のうちに幕を閉じた。

海外宗教事情視察研修会



神道青年全国協議会 平成12年10月2日 成均館大学

十月二日から五日までの三泊四日の神青協の海外宗教事情視察研修会に参加する機会を得、福田会長とともに参加した。本年度の研修の地は隣の国、「韓国」であった。

一日目、ソウルの儒教系大学成均館大学で、現在の韓国における儒教の現状を聞いた。

二日目は午前中、戦争記念館を見学した。見学する前は、日本に対しての厳しい非難があるかと思っただけであるが、意外に少なく、ほとんどが朝鮮戦争に関わるもので、

また、実物の戦闘機・戦車なども展示されていて、お国事情を垣間見るようであった。

夕方には韓国の青年指導者の方々との懇談会があり、徴兵制の話や韓国の宗教事情についての話を聞くことが出来た。かつては儒教国であったが、現在は仏教徒、キリスト教徒が多く、特にキリスト教が増えているということであった。

三日目、南北の国境の板門店を訪ねた。行くまでの警備の厳重さ、板門店での規制など、緊張した状況が伝わってくる一方で、南北統一に向かっていて、その状況がゆるくなっている部分があることも感じた。

(内保 記)

誇りあるものを

継承してゆく為に

三重県神道青年会監事

伊藤 智

日を経たずに新聞の投書欄で、二人の若者からの投書を目にした。

最初は十五歳の男子中学生からで、「今年、初めて昔から町内に伝わる正月行事に参加した。神社で参拝者に酒や甘酒を振る舞ったり、夜通しかがり火を焚くというもので、今まで古臭くて、意義が分からなく抵抗のあった行事だったが、長い歴史が醸し出す神社の雰囲気は圧倒され伝統の価値を感じた。」という内容。その四日後には、「日本人はアメリカの真似したが。年中行事でも、クリスマスやバレンタインは当たり前。逆に豆まきや雛祭りといった伝統行事は、今の若い子達には影の薄い行事になっている。日本人なのに自国の伝統行事より他の国の行事に目が向くのは、自国の文化に誇りを持っていないからだ。これからはもっと日本の文化や個性に着目すべきだと思う。」という十七歳の女子高生からの投書があっ

たのだ。

思わず納得し、心から嬉しく思うと同時に、本来私達が率先して教化していくべき事を、十代の若者達が投書する事に、何かバツの悪さを覚えた。しかし、このような思いが今の若者達の心の中に自然発生的に湧く以上、それにこたえてゆく努力をしなければならぬ。

また同日の新聞には、「日本経済低迷の原因は、欧米の経済社会構造を模倣しすぎて、日本が本来持っていた良いものや習慣を失ったからだ。もう一度その精神に立ち戻るべきだ」とのアセアン財務相会議において東南アジア諸国からの意見があったことを報じる記事があった。

アジアの人達に教えてもらおうという点で、同様の体験をした事がある。平成九年に終戦五十周年事業として三重県神道青年会が主催した、パラオ慰霊友好団での事。現地のイナボ氏達が、涙乍らに英霊の尊さや慰霊の大切さを私達に語る姿をみた時、海外にもこういう人達がいるのだという驚きと有難さ、日本人として英霊に対する認識不足を反省した。さらに現地に今なお残る日本の言葉や文化等

を目の当たりにして、当時の人々の素晴らしさや、私達が日本人として大切なものを失いつつある事を痛切に感じ、この思いや感動を、さらに若い神職たちにもせひ経験してもらいと願った。

石原都知事が、明治神宮での記念講演会の中で「日本がこのまま衰微していったら、その責任はまさしく私たちにある。この会場に來ない左翼の責任じゃない。何と云ったって、日本でマジョリテイをもつ、良識のある、能力のある、それをひそかにどこかで評価し、自負している日本人の責任です。」と述べている。

上述の中学生の投書は、「伝統行事とは、何の為にという事ではなく。それ自体、行う事に意義があり、どんな小さなものでも、歴史に裏付けされた確かなものがある事を感じた。それと同時に、伝統行事が失われてゆく事に対して、少しなりとも認識しはじめたのが、自分だけでない事を願いたい。」とむすんでいる。

先人達の教えを守り、先輩方の指導を受け、それを実践行動し、継承してゆくのが青年神職の務めです。神青会員は、日本の内外か

ら刺激を受けて、英霊を始め先人達が持っていた強い気構えを、私達の心の奥底より啓発し、日本の文化や伝統が、国際社会の中においても十分に誇れる事を自覚し、自信を持って次の若い世代に伝えてゆきましょう。

編集後記

無事「神葉二十七号」が出来上がりました。原稿などご協力いただきました皆様にお礼申し上げます。また、伊藤監事様には公私何かとお忙しい中、ご寄稿いただきありがとうございます。広報は、会員をつなぐ大切な役目があります。次年度更に紙面が充実されるその役目を十分に果たされることをご期待申し上げます。

会報「神葉」

第27号

平成13年3月31日

発行者 福田和人

編集 総務広報委員会

発行所 津市鳥居町210-2

三重県社庁内

三重県神道青年会